患者を支える人々

がん薬物療法認定薬剤師 伊東俊雅さん

1 病室訪ね、薬の説明や相談
2 退院時も管理法など助言

70年生まれ。96年から北里大病院に勤務。99年から緩和ケアチーム薬剤師として活動。05年から東京女子医大病院に勤務し、07年にがん薬物療法認定薬剤師に。

かつて病院の薬剤師は主に医師の処方箋に沿って調剤したり薬品を管理したりしていた。最近は外来でも病棟でも、患者と接しながら薬学の専門性を発揮することが多い。がんの領域では、日本病院薬剤師会のがん専門薬剤師（全国に116人）とがん薬物療法認定薬剤師（同424人）の2種類の資格がある。

東京都新宿区の東京女子医大病院薬剤部には75人の薬剤師がいる。がんの薬物療法で8年の経験があり、がん薬物療法認定薬剤師の資格を持つ伊東俊雅さん(38)は膵臓、大腸、胃など消化器の病気の患者や、がんの化学療法（抗がん剤治療）、がんの痛みや不快な症状を改善する緩和ケアを受けるため入院する患者をサポートする。受け持つ病床は97床だ。

入院初日に持参薬をチェック。入院中は病室を訪ねて患者に薬の成分や働きを説明したり、「薬がのみにくい」などの相談や質問を受けたりする。薬の効き具合や副作用の早期発見に気を配り、伊東さんの方から「夜は眠れますか」「足元はふらつきませんか」と声をかける。

東京都中野区の村上典子さん(69)は胃がんがリンパ節に転移して入院した。「新しい抗がん剤治療を始めたのに、副作用で吐いたり下痢したり。でも、薬剤師さんがベッドまで来ていろいろ説明してくれるので安心です」

副作用がひどくなってからでは、命にかかわることもある。「体の変化はどんなことでも薬剤師に話してください」と伊東さんは言う。

退院時は、日常生活で薬をのみ忘れないためのアイデアや管理法などを助言する。

伊東さんは緩和ケアチームの一員でもある。痛みの治療に詳しい麻酔科医、心のケアが専門の神経精神科医や臨床心理士、緩和ケアに精通した看護師や薬剤師が顔を並べ、毎週、入院患者の枕元をチームで訪ねる。

前夜、痛みで眠れなかったという女性は、医療用麻薬の効果で、チーム回診時には穏やかな表情だった。「どんな症状でも、がまんしなくていいんですよ」。がん特有のいやなにおいも、院内でつくる軟膏で改善できる。

伊東さんは18歳のとき、幼なじみを悪性リンパ腫で亡くした。「いつか、がん医療に役立つ薬の研究もできれば」

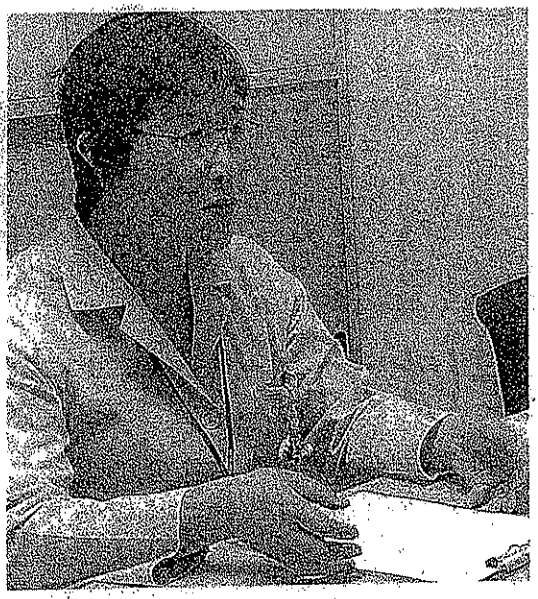
（医療ジャーナリスト・福原麻希）

（アスパラクラブのホームページに福原さんの取材記を掲載しています）

2/17付
朝日新聞

患者を支える人々

患者と家族の悩みに対応
口調ゆっくり 相手和ませる



ソーシャルワーカー
佐原（さはら）まち子さん

東京都文京区にある東京医科歯科大病院の医療福祉支援センターは、3階エスカレーターのすぐ近く。5人のソーシャルワーカーと1人の在宅医療専門看護師が、入院中や外来の患者と家族の悩みに対応している。

副センター長で社会福祉士と精神保健福祉士の国家資格を持つ佐原まち子さん(55)はソーシャルワーカーになって33年。がん患者からの相談で最も多いのは退院後の療養先選びと言う。

おおまかに、病院は手術など治療が中心の急性期病院と療養に比重を置く慢性期病院に分かれ、急性期の治療後の患者は自宅や慢性期病院、緩和ケア病棟などに移る必要がある。

近年は在宅療養を希望する患者が増えてきた。だが、本人も家族も不安は大きい。佐原さんは、面談で患者のこれまでの生き方や考え方、現在の状況を聞き、在宅療養をサポートする仕組みを説明する。慢性期病院や緩和ケア病棟を希望する患者には、地域の病院を紹介したり、手続きを手伝ったりする。

患者の不安や悩みは幅広い。「治療費が払えない」「医療保険に入っていない」といった不安や、「がんになったことを会社にどう話せばいいか」などの相談が寄せられる。家族からは「本人にどう告知したらいいか」「患者とどう向き合えばいいか」と尋ねられる。一人ひとりと40～50分かけて面談し、話を整理し、必要な情報を伝える。

東京都新宿区の伊藤照美さん(45)は母が大腸がんで突然入院したとき、佐原さんに何度も相談した。「情報のやりとりだけでなく、励ましてもくれて心強かった。駆け込み寺のようでした」と振り返る。

毎日、佐原さんは15～16件の相談に対応する。院内を忙しく動き回るが、口調はゆっくり。面談で深刻な話題になっても、クスッとした笑いを心がけ、相手を和ませる。

この仕事のやりがいは「いろいろな生き方を学べること」。患者や家族の話に心動かされ、涙ぐむこともあるが、常に「体を見すえて、客観的に判断します」。

趣味の日本画と篠笛（しのぶえ）で心をなごめる。が、いまは、病院のソーシャルワーカーらでつくる日医療社会事業協会の研修会講師として、週末に全国を飛び回る。（医療ジャーナリスト・上原麻希）

79年から関東逓信病院（現NTT東日本関東病院）に勤務。02年から現職。元国立がんセンターがん対策情報センター運営評議会委員。4児の母。

アスパラクラブのホームページに福原さんの取材記を掲載しています

患者を支える人々

認定開始10余年、全国に128人
チーム医療の調整役

がん看護専門看護師 田墨恵子（たずみけいこ）さん

大阪大病院オンコロジーセンター看護師長の田墨恵子さん(43)には、もう一つの肩書がある。今年で6年目の「がん看護専門看護師」。患者が通院しながら抗がん剤治療を受ける同病院の外来化学療法室で、がん看護のスペシャリストとして働く。

同室では、5人の看護師が1日30～40人の患者を安全で効果的に治療するためのケアを受け持つ。田墨さんは、患者が希望する治療を実現させるため、医師をはじめとした他の職種の担当者らと話し合い、家族との橋渡しもする。がん医療についての深い知識、患者の体の状態に応じた適切な判断力、院内でのコミュニケーション力で、チーム医療の調整役になる。

患者の悩みや不安は多様だ。「医師から抗がん剤治療を勧められたが、受けたくない」「仕事や生活と治療はどう両立できるか」「どうしてがんになってしまったのか」。田墨さんは患者の声に耳を傾け、心の整理を手助けしたり、解決法を一緒に考えたりもする。

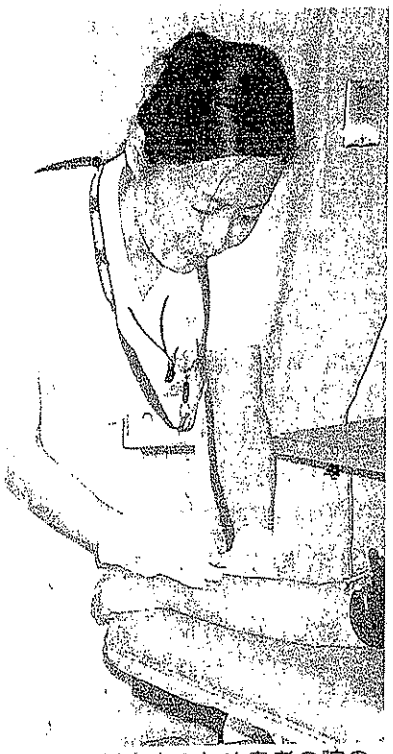
昨年4月に乳がんが再発した大阪府茨木市の女性(42)は「不安なことは何でも田墨さんに相談する。忙しそうでも、ゆっくりしゃべってくれて、心が休まる」と言う。

専門看護師は、看護師の実務を5年以上経験し、看護系大学院で特定の分野の知識を深め、技術を高めた看護師の資格だ。日本看護協会が96年から認定している。がん看護のほか、「慢性疾患看護」「老人看護」など10分野がある。現在、がん看護専門看護師は田墨さんを含めて全国に128人いる。

田墨さんは、つらい抗がん剤治療を患者が懸命に受ける姿に胸を打たれ、がん看護専門看護師を志した。患者が最期まで笑顔で過ごすことができるかどうかは、「私たちのちょっとしたがんばりしだい」。田墨さんは今日も患者に寄り添う。（医療ジャーナリスト・福原麻希）

◇

病院では医師以外にも様々な専門職の人々が働いています。看護師など歴史が長い職種だけでなく、臨床試験コーディネーターのように比較的新しい職種もあります。患者の人生や価値観を重視するチーム医療が広がり、「コメディカル」と呼ばれるそうした人たちの役割が改めて注目されています。患者を支える人々の素顔を紹介します。



抗がん剤治療のため患者の腕の血管に針を入れる田墨恵子さん＝大阪大病院

65年生まれ。86年から大阪大病院に勤務。02年、兵庫県立看護大学院修士課程修了。03年にがん看護専門看護師の認定を受け、04年（現兵庫県立大看護学研究科）大から現職。